

障害という差異が本質化されない運動経験はいかなるものか

——たんぼぼ運動におけるPさんの事例から——

平島 朝子（関 朝子）

これまで障害学／障害の社会学では、障害を抑圧と捉えることが障害の本質化に繋がるといふ指摘や、障害者運動における、障害者とされる者と健常者とされる者との間のコンフリクトなどが提示されてきた。そこで本稿では、実践レベルにおいて障害を本質化しないことの可能性を模索する試みとして、Pさんという障害のある人が、たんぼぼ運動という障害者運動に参加する中で、障害という差異／アイデンティティを意識していなかったり、するようになったりする過程を明らかにした。

具体的には、M. Wiewiorka (2001=2009) による集合的アイデンティティの生成条件の議論に着想を得、たんぼぼ運動に関わる中でPさんが障害を差異として意識するようになったり、積極的に「障害者」として考えたり発言したりする契機として、契機A：障害という差異への貶価、契機B：運動への関わりにおける障害の積極的な意味づけの可能性の二つを置き、これに基づいてPさんの経験を再構成した。

1 はじめに

1-1 関心の所在

本稿は、Pさんという障害¹のある人が、たんぼぼ運動という障害者運動に携わる中で、障害という差異をどのように経験していたのかを考察することを通じ、実践レベルにおいて障害を本質化しないことの可能性を模索する。

倉本智明(1999)は、障害に関する社会運動の中でも、障害に否定的な社会の価値観を問い質しながら、障害と共に生きることを価値づけようとする運動のことを「障害者解放運動」と呼ぶ。このような障害者解放運動の日本における嚆矢は、1970年ごろに隆盛した「青い芝の会」の運動とされる。「青い芝の会」は、脳性麻痺の当人たちの集まりであり、1957年の結成当初は娯楽や交流を目的としていたが、1970年に転換期が訪れた(立岩2012: 265)。というのは、親が障害のある子どもを殺めた事件とそれへの減刑嘆願運動とを受けて、「青い芝の会」は「障害児であれば殺されても仕方ないというのか?」と問い、障害を否定的に捉えることを自明とする「健常者中心主義」を批判しながら、差別の撤廃を求める活発な運動を行うようになっていったのである(立岩2012; 横塚2007)。

「青い芝の会」の運動は、収容施設拡充などの当時の福祉施策の目標の差別性を指摘し、その根本的な方向転換を求めた意義深い活動であった。一方で、「健常者中心主義」の問い直しや、ともすれば健常者によって自身の考えや願いを抑圧されてきた経験から、介助者の内面にあるだろう差別意識の批判が忌憚なく行われたり、また、「介助者手足論」が提唱されたりした。山下幸子(2008)は、こうした脳性麻痺の当人と介助者との関係の難しさと経済的な困難さがあいまって、介助者の集まり「グループ・ゴリラ」と、「青い芝の会」の間に衝突が

生じていたこと、「グループ・ゴリラ」が解散させられる／する事態があったこととの歴史を再構成している。このような、障害とされた者と健常とされた者との共闘の困難の背景には、障害／健常という差異をどのようにまなざすかという問題がある。この点について、障害学の論者／活動家である T. Shakespeare (1996) は、社会モデル以降の障害者のアイデンティティ戦略の可能性を論じる中で次の指摘をしている。それは、「障害者は抑圧されている存在だ」という抑圧モデルに依拠して障害アイデンティティを構築することは、障害／健常という差異を本質化することに陥ってしまうという逆説である (ibid:107)²。こうして障害／健常の区別が問いなおされなくなり、障害とされる者と健常とされる者との対立の萌芽が生じていく³。

対立が生じることは、とりわけ 1960 年代以前の障害者が沈黙させられてきた歴史を踏まえればそれ自体として問題視すべきことでは全くないが、一方で障害者と健常者の連帯を模索する試みとして障害の本質化の回避を考察することもまた無意味ではないだろう。こうした試みの一つとして、本稿は、P さんという障害のある人が、障害者やその家族の他にも様々な人が関わっていたたんぼぼ運動という障害者運動に携わる中で、障害という差異／アイデンティティをどのように経験していたのかを考察し、これを通じて障害が本質化されないあり方の可能性を模索したい。

1-2 たんぼぼ運動の概要

P さんの経験に照準する本稿であるが、それでは P さんが関わっていたたんぼぼ運動とはどのようなものであったか。

たんぼぼ運動は 1973 年の奈良県で始まった障害者運動である。重度の脳性麻痺とされた子どもをもつ母親たちが、養護学校卒業後の子どもが家庭や収容施設での閉鎖的な生活を送るほか選択の余地がなかったことを問題として、「たんぼぼの会」(現「奈良たんぼぼの会」)を立ち上げたのであった。彼女たちは、子どもたちが社会とのつながりを保ちながら生活していける場「たんぼぼの家づくり」を目標として、地域住民に協力を求めて回り、発足時点で 20 名ほどであった会員は 1975 年には 2000 名を超えるようになっていた。

この年に、たんぼぼ運動の方向性を大きく変える判断がなされた。というのは、親＝正会員、その他の者＝賛助会員という区分が撤廃されたのである。これは、障害問題は家族だけではなく社会全体で考えていくべきだ、という方針を強化するものであり、これを受けて、運動の担い手が母親たちだけではなく地域の人々であることが自覚されていくようになった(平島 2019)。そして、当初の運動目標「たんぼぼの家づくり」の上位に位置づくものとして、地域への啓発活動である「福祉風土づくり」が掲げられるようになり、障害問題に関わらない社会課題についても、講座の開催やコンサートなどの文化活動が行われていった。

このように、たんぼぼ運動の事例としての特色は、障害者自身やその家族に会員や関係者が限られておらず、かつ各々の社会的属性に応じた序列や役割の固定を避けようと試みていた点、そして障害問題を中心としながらも様々な社会課題に取り組んだ点にある。

一方、他の障害者運動のほとんど⁴が、当事者が運動主体となることを重要視していたり、運動の担い手が障害者家族に限られることを自明視していた。まず、先に触れた同時期の障

害者運動「青い芝の会」では、「介助者手足論」に顕著のように、障害という社会的属性に当てはまらない立場の者についてはあくまでサポートにとどまることが求められた。また、1980年代以降に活発化するCIL/JILの運動においては、国際的潮流と歩みを共にしながら「当事者主権」が提唱されてき、正会員となる団体には「意思決定機関の責任者および実施機関の責任者が障害者であること」「意思決定機関の構成員の過半数が障害者であること」（全国自立生活センター協議会 2021）が要件として課せられている。

そして、「青い芝の会」の運動と自立生活運動との両者が批判している、1950/60年代ごろの障害者の親の運動に関しては、担い手はあくまで障害者家族に限られていた。これらの運動が求めたのは、家族内で介助を担いきれなくなった障害者を収容するための施設の拡充であり、かつそれは要求ではなく陳情という形式で求められた（堀 2014）。担い手が障害者家族に限られていたことや、陳情という方法の背景には、障害は個人的な問題であり家族愛を以って対処すべきだという社会意識があったと指摘されており（岡原 2012）、したがって、ここにおいても運動の担い手の拡大の契機は見当たらない。

このように見てみると、たんぼぼ運動は、障害者自身やその家族にとどまらない地域の人々が担い手となることを目指し、各々の社会的属性に応じた序列や役割の固定を避けようと試みていた点において、障害当事者中心の運動やそれに先行する親の運動とも異なっていたことがわかる。ただし、たんぼぼ運動にはボランティア、スタッフ、メンバーという立場が用意されたが、このうちメンバーについては障害のある人のみが立つことのできる位置であった。

このように障害者やその家族の他にも様々な人が関わっていた運動に身を置いたPさんの経験において、障害の本質化がある程度免れられていた可能性があると考えられる。そこで本稿は、たんぼぼ運動への関わりにおいて、Pさんが障害という差異をどのように経験していたのかを考察していく。

2 分析枠組み

2-1 アイデンティティの意味と位置

社会学におけるアイデンティティ研究は、アイデンティティが個人にア priori な本質的なのではなく、社会との相互作用によって事後的に構築されるものだという理解に貫かれてきた。今日では、アイデンティティが単一の社会的属性に一致しきらないという多様さや、政治的決定の中で孕まれる複合性などが指摘されている。

たとえば、草柳千早（2004）は、性的少数者が、自身に付与されがちな社会的属性を引用しつつもそこからの距離を述べるような「曖昧さ」の出現を指摘している。また鄭暎恵（2006）は、移民二世の経験として近代国民国家から答えを要請される「いずれの国民であるか」という問いへの葛藤を描きながら、実のところアイデンティティが政治的に付与・構築された複合性を帯びたものであり、「アイデンティティの政治」を暴くことこそが重要だと述べている。仁平典宏（2017）は、こうしたアイデンティティ概念の展開を踏まえ、現在の課題として「そのつどの主体構築／変容の実践のありようを文脈に即して記述し、そこにいかなる行

為の可能性が開かれ／閉ざされていくのかを明らかにすること」(仁平 2017:12) を挙げる⁵。

障害の主題においても、Shakespeare (1996) はアイデンティティを構築的なものとして捉え続けることが重要だと主張する。こうしたアプローチによって、障害アイデンティティのポジティブな変換が、定義によってもたらされるのではなく、営みによって継続的に達成されるあり方を描くことができる、という (Shakespeare 1996:103-104)。

このような障害アイデンティティの変容過程に着目した質的研究には、自閉症とされる音楽家のライフストーリーから、「無能」というレッテルを不当なものとして意味づけなおす日々の営みが当人のエンパワメントにつながる経過を描いた I. C. Almendros と R. C. Almendros (Almendros and Almendros 2016)、自閉症とされる子どもが場 (家、クラブ、学校) に合わせて自閉症というカテゴリーの意味づけや提示の仕方を調整する実践を明らかにしたエスノグラフィーである A. D. Baines (2012)、支援場面への参与観察を通じて、当人にとっての発達障害の意味合いが「周りを困らせる人」から「誤解を受けている人」へと描き変えられていく様子を描いた浦野茂 (2019)、包摂的实践の有無が障害のある人の自己肯定感やエンパワメントに伴う苦勞の開示／非開示に影響することをインタビューから描きだした CW. Cunnah (2015) などがある。

これらは、障害の意味づけについてポジティブ／ネガティブという軸を暗黙に前提している。しかし、このような意味の水準のみならず、アイデンティティ以前の差異、そしてその差異がそもそも意識される／されないという位置の水準まで踏み込むことで、当該属性の文脈依存性をより強く織り込んだ分析が可能となる。そこで本稿は、Pさんがたんぼぼ運動に関わる中で、障害という差異を意識していなかったり、意識／意味づけをするようになったりする変容過程に注目する。

2-2 差異の経験を捉える枠組み

本節では、M. Wiewiorka (2001=2009) が提案した集合的差異／集合的アイデンティティの生成に関する議論に基づきながら、Pさんのたんぼぼ運動への関わりにおける、障害という差異の経験を捉える分析枠組みを提示する。

Wiewiorka は、「新しい社会運動論」概念を提案した A. Touraine の次世代にあたる社会学者である。A. Touraine は、「新しい社会運動」の担い手を、教育レベルの高さなどの有利さを持ちながらも、社会を統制する立場には立つことがないような人々 (宮島 2016: 175) と捉えた。一方、次世代にあたる Wiewiorka は、そうした有利さを持たない移民二世の運動を知ることとなった。例えばフランスに暮らすイスラム教徒たちがホスト社会の偏見に抗い、自身たちの毀損された属性＝イスラム教徒であることの価値の回復を目指すような運動がある。こうした運動において主張される集合的アイデンティティ⁶ は、歴史的厚みのある原初的差異に根差しておらず、先立って集合的差異が生成される必要があるという⁷。

それでは、集合的差異ないし集合的アイデンティティはいかにして生成されるか。Wiewiorka は次の二つの生成条件を挙げている。一つは、ある差異について当該社会からの「支配、拒否、貶価が存在すること」(Wiewiorka 2001=2009: 156) である。そのような剥奪がなければ、所属を構築しようという動機が生じないためである。もう一つは、その集合に関わ

ることで得られる集合的アイデンティティが、その人にとって自らを肯定的に提示できるための資源となることである。

集合的アイデンティティが、そこに自分を位置付け、自己投入することを決めた人々に対し、存在にかかわるいくつかの方向性、すなわちひとつの文化的意味や倫理、道徳、生き方、宗教、また（それが架空のものであろうとも）何らかの出自への依拠を提示できなければ、そのようなアイデンティティはなかなか選択されたり、主張されたりしないだろう。（Wieviorka 2001=2009: 157）

そして、そのような「存在にかかわる方向性」を運動が提示するためには、運動の経済的資源ではなく、むしろ文化的資源が重要である。なぜなら、それはスティグマ化された差異をポジティブなアイデンティティへと「逆転」させるための資源だからである。

以上の Wieviorka の議論には次のような限界がある。まず、Wieviorka の議論では、ある毀損された差異について一つの集合的差異が立ち上がり、その意味づけを積極的なものへと転換させることで集合的アイデンティティが成り立つというストーリーがみられる。ここでは、偏見に晒されたイスラム教徒が集合への帰属を通じてイスラム教徒であることの積極的な意味づけを得る、というように、個人の属性と集合の枠組みとが意味上のまとまりを持つペアであることが前提されており、意味の変容が主題化される。しかし、そうしたペア関係が見られない場合には、差異に根差さずともある集合に帰属していくことは論理的に可能である。こうした対象は Wieviorka の射程外にあり、したがって Wieviorka は、差異の意味以前に、当該属性がそもそも意識されるのかという位置を問う視座を有していない。

本稿の対象について言えば、たんぼぼ運動は障害のある人やその家族に限られない様々な人が関わっており、障害問題を中心課題としながらも、その他の社会課題にも積極的に関与している。つまり、障害がないとされる人が障害問題に関心を寄せていることもあるだろうし、障害があるとされる人が障害問題以外の角度から運動に出会うこともまたあり得るのである。このとき、個人の属性と集合に帰属を見出す基準とを、意味上のまとまりを持つペアとして捉えることは難しい。

次に、これら二つの条件を、集合的アイデンティティの生成のための条件として位置付けているため、その集合に帰属を見出した個人が、その後どのようにアイデンティティの変容を経験するのかをたどる視点が抜け落ちている。前項で見たようなアイデンティティの可変的側面を踏まえれば、この視点を取り入れることは有意味であろう。

上記を踏まえて、本稿では次のような分析枠組みを提示する。まず、個人の属性と集合の枠組みとのレベルを区別し、これらが意味上のまとまりをもつペアになるとは限らないことを認識する。このとき、個人のアイデンティティの変容について、当該属性をポジティブに捉えるといった意味の位相だけではなく、そもそも差異として意識されるかどうかという位置の位相までが分析の射程に含まれることになる。このとき、意味づけをあらかじめ含意するアイデンティティの経験ではなく、まず差異の経験に注目することが適切である。

そして、Wieviorka が論じた二つの条件について、その内容は踏襲しつつ、集合的アイデン

ティティの生成の条件としてではなく、ある人がある運動に関わる中で、関連する自身の属性を差異として意識するようになっていたり意味づけたりするようになる契機として位置付け直す。なお、条件ではなく契機とするのは、「集合的アイデンティティが生成する／しない」という二元的思考をするのではなく、その契機が生じた後に差異に関してどのような変化が見られるかが未規定であることを踏まえた考察をするためである。以上を踏まえて、

契機 A：障害という差異への貶価

契機 B：運動への関わりにおける障害の積極的な意味づけの可能性

とを、本稿の分析枠組みとして提示する。このモデルでは、集合への帰属を前提としたうえで個人のレベルに定位して議論を進めることになり、Wiewiorka の関心であったそもそもの集合の生成についての考察は射程外となってしまう。しかしその一方で、運動に関わって以降の個人の経験について、当該属性に関する差異／アイデンティティの変容を、意味の水準だけではなく位置の水準にまで踏み込んで記述することが可能になる。

3 P さんに注目する理由と調査概要

本稿が P さんに注目するのは、彼女がたんぼぼ運動との関わりについて、常に障害に依拠した理由づけをしているわけではないと考えられるからである。根拠は以下の通りである。

まず、P さんとたんぼぼ運動との出会い方が挙げられる。運動に関わった障害のある人のほとんどが、たんぼぼ運動を立ち上げた母親たちの子どもであったり、養護学校卒業後にたんぼぼ運動の運営する「たんぼぼの家」⁸ にメンバーとして所属することになった人たちであった。一方、P さんは、高校生の頃に自身でたんぼぼ運動のイベントに足を運び、関わるようになっていった⁹。よって、たんぼぼ運動に関わることと自身の障害との関連性は、他の障害のある人と比べて P さんにおいて自明ではなかったと考えられる。

次に、P さんが障害のある当人であることが、たんぼぼ運動への関わり方において明示されたり、されなかったりしていたことが挙げられる。P さんはまず地域の高校生として、そしてボランティアとして運動に足を運ぶようになり、ある時から障害のある人たちしかすることができないメンバーという立場を選択するようになった。さらにその後にはメンバーではなくスタッフとして携わるようになった。このような変遷からは、障害という差異がそれぞれの立場において別様に経験されていた可能性が考えられる。

P さんへのインタビューは 2019 年 11 月 24 日に 3 時間程度実施した。インタビューの目的としては「たんぼぼ運動一般のことではなく、P さんにとってのたんぼぼ運動での経験や思いが知りたい」と考え、また伝えていた。筆者は、それ以前にたんぼぼ運動の会報「たんぼぼだより」「年次レポート」を読み込み、事前に出来事を時系列に整理したインタビューガイドを作成していた。これは P さんの記憶補助や、筆者が気になっていた出来事について訊ねることを趣旨として作成した。しかし、調査目的に則りガイドの使用はごく補助的なものにとどまっている。また、本稿の考察の妥当性を担保するため、原稿について P さんへのメンバーチェックを実施している¹⁰。

次節では、インタビューデータと会報のデータとを用い、Pさんとたんぼぼ運動との関わりを時系列にて整理する。その上で、Pさんのたんぼぼ運動への関わりにおける、障害という差異の経験の変容過程を5節にて考察する。

4 Pさんのたんぼぼ運動における経験

4-1 たんぼぼ運動との出会い

たんぼぼ運動は1973年に障害児の母親たちを中心として始められた。たんぼぼ運動の目標の一つは、障害のある子ども達の養護学校卒業後の生活が、家庭内や施設等に閉ざされるのではなく、地域との関わりの中で営まれていくようになることであった。そのために地域への啓発活動を様々に行っていたが、中でも主要なものがわたぼうしコンサートであった。わたぼうしコンサートとは、障害児の作った詩にメロディーをつけた楽曲を披露するものであり、障害児達の思いや声が社会に届いていないのではという問題意識から始まった。

Pさんがたんぼぼ運動を知ることになったのも、このわたぼうしコンサートがきっかけであった。Pさんは1964年に生まれ、小学校から高校まで養護学校に通っていた。養護学校は、「私も含めて、自分で動けない子ども達ばかりやから、行動範囲とかも狭くて、親が行かないといけなかったり」[P Interview 2019.11.24]したが、高校生になってからのPさんは一人で外出することもあった。そのような折りに、わたぼうしコンサートを聴きに行ったのであった。

わたぼうしとか行ったら、ボランティアの人が多いじゃないですか。おんなじ年代の子とか、ボランティアしてたりとか、結構あって。あ、面白いなと思って。で、そういう養護学校以外の高校生とか、ボランティアの人とかが、たんぼぼの家があるからおいでよって言ってくれて、面白そうやな、行こうと思って行ったのがきっかけです。

[P Interview 2019.11.24]

Pさんがたんぼぼ運動に関わるようになった1980年は、「たんぼぼの家」という日中活動の場が建てられた年である。ここでは、すでに養護学校を卒業していた人たちが、メンバーという立場で、勉学や趣味、仕事の模索等をしていた。Pさんは、当初はこうした日中活動に参加するのではなく、ボランティアとして関わっていた。具体的には、そのほかの高校生達と一緒に、障害を持っている人とどうつながって生きていくのかといったテーマでボランティアスクールを企画・運営するなどしていた。一連の作業に大人の助けがあることは少なく、高校生達自身が考えて取り組んでいたという。当時の気づきについて、Pさんは次のように語る。

やっぱり色々な高校生とおんなじ目線で話してて、健常者って言われてても差別受けたりする子も中にいたし、お母さんしかいなくて苦労して生活してるっていう子もいたりとか。それこそ勉強がなかなか難しくって学校の勉強について行かれへん、っていう子がいたりとか。本当に色々な子らがいるのに気がついて、自分だけのことを主張

してたらあかんあって、その時に思ったんです。それはたんぼぼのみんなが思ったことやった。

[P Interview 2019.11.24]

4-2 大学進学と就職活動

Pさんは高校を卒業した後、一浪を経て大学へ進学し、養護学校教諭になるという志のもとに教育学を専攻した。大学進学を機に親元を離れて暮らしたいと考えていたが、それは親の反対もあり叶わなかったようだ。

大学を卒業したのち、養護学校教諭になるための勉強をしていたが、しばらくしてその仕事は「違う」と感じ、その道を進むことはなかった。また、一般企業や行政への就職を検討したが、仕事中に介助者を見つけることができないという障壁から実現しなかった。

障害を持ちながら働いていたら、今この時代でもすごい難しいですよ。介助が必要だったりとか。常に、トイレ行くにしても、ご飯食べるにしても介助がいる中で、仕事をするって言ったときに、介助者をつけられるわけでもないのに、一般企業で働くとかがなかなか難しくって。私も大学卒業した時も、一般企業とかそういうところで働くか、大学を出てるから行政で働くかっていう話もなかったわけではないけど、とにかく働くっていうこと自体、難しいんですよね。それで、じゃあどうするかって言ったときに、言い方悪いんですけど、たんぼぼが受け皿になるっていう。

[P Interview 2019.11.24]

様々な将来を模索していたPさんであったが、就職における障壁から大学卒業後の所属先を得にくかった経緯があり、たんぼぼ運動への関わりを深めていくようになる。

4-3 メンバーになる

大学卒業後のたんぼぼの家との関わりとしては、しばらくは養護学校教諭になるための勉強の合間の活動であったが、たんぼぼの家より会長職への打診を受けてからは、「社会経験とかあまりなかったから、ちょっとお断りして、で、3年待ってくださいと言って、それで、3年間、やってないけど修行して(笑)。たんぼぼの活動に関わった経験とかを文章にしたりとか、そういう仕事をさせてもらったり、色々たんぼぼの勉強をしました」[P Interview 2019.11.24] というものであった。実際に、たんぼぼ運動の会報『年次レポート』によれば、Pさんは1987年度より理事、1988年度と1989年度には副会長、そして1990年度から1996年度まで会長となっている。

また、会長になることに先立ち、Pさんは、これまでのボランティアの立場ではなくメンバーとして活動するようになった。1988年度の『年次レポート』のメンバー紹介には、それ以前は登場していなかったPさんが登場し、「知的女性の名を欲しいままにしてきた(?) Pさん。メンバーの相談役として、女性リーダーの時代に力強い足跡を残していただくことでしょう。めざせ! 土井たか子!! 性格: 知性がじゃまするタイプ」(1988年度「年次レポート」14頁)との他己紹介がなされている。

メンバーという立場には、障害のある人たちだけができる。高校生以来ボランティアとして活動してきたPさんにとって、自身の障害は、「あんまり意識したこともなかったし、言われたこともなかった」[P Interview 2019.11.24] ことであったが、では、Pさんはメンバーになることをどのように受け止めたのであろうか。

Pさん：たんぼぼの会を進めて行ったりとか、たんぼぼのことを考える上で、メンバーの立場になるっていうのがやっぱり大事なことやなって思って。障害持ってない人がじゃあメンバーになれるかっていったらなれないじゃないですか。

筆者：えー、そうですね、制度の意味ではなれないですね。

Pさん：制度の意味でなれへんし。その制度とか色んな絡みがあって、メンバーの立場からたんぼぼを見るという事も大事やなあというのはすごい思ったんですね。

[P Interview 2019.11.24]

こうして、メンバーとなる際には、それ以前はあまり重視されなかった障害という自身についてのいち側面が取り出されたのであった。そしてメンバーになってみると、運動が「親目線」で進んでいるという気づきがあったという。

たんぼぼってすごい良いんですけどね、お母さんたちが頑張ってきたから、それはものすごく高く評価するところやし、それで今まで成り立ってきたからいいんですけど、否定するところじゃないねんけど。..... 子どもが声を出すより、お母さんたちが声を出すから、親目線。親目線でいって、良いところも悪いところもあるけど、親目線やったなあというのはあって。どうしても、どの団体もそうやけど、親目線でいくと、子どもの声っていうのは、ちっちゃくなっていくじゃないですか。そこが、実際どうなんやろ、っていうのが、メンバーになってわかったこと。

[P Interview 2019.11.24]

また、メンバーになることは、Pさんにとっては介助を受けやすくなることを意味した。

筆者：ボランティアとしているか、メンバーとしているかでどう違うんですかね。

Pさん：それね、えーとね。まず..... 私、ほんまに何も自分でできないんです。トイレ行くにしてもご飯食べるにしてもお風呂入るにしても、ヘルパーさんにやってもらって。..... ボランティアはやっぱりボランティアやから、手厚くというか、ケアの面で、介助の面で、メンバーになった方がきちんと、いつでもやってもらいたいときに遠慮なく言えるっていうのがあったし。

[P Interview 2019.11.24]

こうして、たんぼぼ運動への関わりにおいて、障害があるということを含意するメンバーという立場に立つことになったが、一方で、他の障害のあるメンバーとの間で強い「われわれ意識」が生じたわけではなかった¹¹。その背景の一つは、インペアメントの程度の差異にあるようだ。当時のPさんは、車椅子を使用しておらず、また、言語障害があるとはいえ他

のメンバーよりも聞き取りやすい発声であった。Pさんは「Pちゃんは、やってほしいこととかやりたいこととか自分で言えるし、歩けるやん。だから、やりたいことできるねん」と言われたことがあり、また、メンバー同士の関係は「この人はこの人、私は私」という雰囲気であったという [P Interview 2019.11.24]。

4-4 エイブル・アート・ムーブメントとコットンハウスの建設

6年間会長を務めたのち、1997年に、Pさんはメンバーではなく嘱託スタッフになった。たんぼぼ運動は、1995年から「エイブル・アート・ムーブメント」という芸術運動を始めていたが、メンバーとしても、スタッフとしても、Pさんはこれに関わっていた。アート在前面に出していくことを聞いた当初は戸惑いもあったが、アートを通じてインペアメントがむしろ豊かな表現への強みになるという体験をし、スタッフになってからも美術館との協働プロジェクト等に携わるようになった。これらの体験とは次のようなものであった。

私は言語障害があるけど、これがね、障害じゃなくなるんです。芸術になると。..... 私たちは一個一個、声を出そうと思ったら、すごいそこに全部集中しないと、出ないんですよ。で、それが、伝わるっていうか。だから、魂。..... それが、分かる人には伝わるんです。

[P Interview 2019.11.24]

今まで美術館の学芸員の人があって、障害を持ってる人のことって全くわからないじゃないですか。でも一緒にやりながら協力してくれはったりとか。ほんで、学芸員の人も障害者アートに目を向けてくれたりとか。..... 全く障害者と関係ないところで仕事をされている人が、いきなり私とかと一緒に仕事をするっていう。なんていうんだろう、最初はどうしたらいいのやろ、どう関わったらいいのやろって思ってたけど、だんだん一緒にしていくうちに、..... 障害者アートをすごいなあという見方ができて。なんか上から目線の言い方やけど、わかってきてくれはったりとか。

[P Interview 2019.11.24]

また、Pさんがスタッフとして勤めた1997年度から1999年度は、たんぼぼ運動では「コットンハウス」という共同生活の場の建設が一大プロジェクトとなっていた時期である。このプロジェクトは、自分自身、親元を離れて暮らすことを反対されてきたPさんにとって、様々な思いがめぐるものであった。

コットンは、私としては、私個人としては、コットンが登竜門やったらいいなあ、通過点やったらいいなあって思ってたんですよ。で、まず、コットンで生活して、それで地域で暮らすっていう、こんな流れがあったらいいなあって思ってたんですよ。

[P Interview 2019.11.24]

結局のところ、コットンハウスは登竜門的存在というよりも、出来る限り個々の生活を尊重することを試みる共同生活の場となっていた。「たんぼぼの精神を、ほんまに、ほんまに

やっていこうと思うんやったら、やっぱり誰かが、みんながみんなじゃなくてもええねんけど、地域の中で暮らしていくということじゃないとあかんと思います。」と述べるPさんは、その後、結婚・出産を経、実家を離れて地域での生活を20年近く送ってきた。

4-5 自立生活センターでの仕事

現在、Pさんは自立生活センターにてピアカウンセラーとして勤務している。Pさんがこの仕事において大切にしていることの一つは、「相手が話してくれることによって、相手が自分で解決方法を見つける」ことだという。それは、今までの経験や立場によって、他の人の困っていることを理解できるかどうかは大きく変わってくるからだという。

やっぱり、色んな立場に人間たったら、そのおんなじ立場の人のことをより深く理解できるっていうか。あの、もちろん、経験なくても全く理解できないわけじゃないけど、でも、経験はすごい大きいなあと思って。.....就職したいけどできないということではぶつかっている人に対しては、「同じ同じ、その経験あるわあ」と言えたりするんですけど、もうちょっと重度な人で、全く初めから就職ということは考えてなくて、というと、どこでぶつかっているのか、というのが経験を通しては見ることができへんから。.....いろんな立場に立つてことが大事なんやっていうことを、たんぼぼのメンバーになった時にわかったし。

[P Interview 2019.11.24]

また、インタビューにおいて、筆者が「地域だけが正解なのか」と悩みを吐露した際には、Pさんは沈黙ののちに「地域で生きなあかんでしょ。」「平島さん。地域の中で生きていくことが当たり前やと思ってください。」「そうじゃないと、いつまでもね、きついいい方やけど、嫌な言い方やけど、いつまでも、障害持ってるって檻の中で暮らしなさいってことになる」と重ねて述べていた。その上で、地域での生活の中にも問題点は見出されるという。

今、現状、自立支援っていうのがあって公的なヘルパーを派遣してもらえて、制度が整っているやないですか。ヘルパーばかりに頼ってしまう人が多くなっているんですよ。やっぱり人間はこう、暮らしって考えたときに、遊びの部分もあるし、暮らしの部分もあるやないですか。ヘルパーって制度なわけやから、全部それでっていうわけにもね。.....私たちのCILですごく言っているのが、全部ヘルパーに求めてしまう、ヘルパーに友達の役割も求めてしまうこと。.....でも、多分これって、生活というか、ヘルパーの制度が整ってくるから生きやすくなってきてる部分なんですけど、私もたんぼぼとか知らへんかったら陥ってたかもしれへんなと思いますね。

[P Interview 2019.11.24]

こうして、たんぼぼの家を退職したのちにも、地域での自立生活を推し進めていく仕事をしているPさんは、そうした現在の自分について「たんぼぼっこ」と形容していた。

5 考察：障害という差異の意味・位置の変化

ここまで、Pさんのあゆみを時系列に整理してきた。本節では、Pさんがたんぼぼ運動と出会ってから結婚を機に退職するまでの間、障害という差異を意識したり、障害に根ざして自己を規定したりすることがどのようにしてあったか／なかったかについて、2節で提示した二つの契機を分析枠組みとしながら考察する。二つの契機とは、契機A：障害という差異への貶価、契機B：運動への関わりにおける障害の積極的な意味づけの可能性、であった。

5-1 契機A：障害という差異への貶価

そもそも、健常とされる身体が基準とされる現行の社会に暮らす中で、障害という差異に対するネガティブな眼差しや取り扱いに触れる場面が数多くあるだろうことは想像に難くない。つまり、契機Aは日常に散りばめられているようなものであろう。これらの全てに言及することは本稿の目的に即さないため、本節では、Pさんのたんぼぼ運動との出会いや関わりにおける契機Aと、それを受けての障害という差異の意味づけ・位置付けの変化とを辿る。

まず、Pさんは高校まで養護学校に通っていた。このことを、周囲に障害児者とその家族、支援者しかいないような空間への隔離と捉えて、障害者の社会的排除、すなわち障害という差異への貶価と捉えることが可能である。

次に、たんぼぼ運動に関わる中で、契機Aは日常に埋め込まれていたと考えられる。というのも、Pさんはたんぼぼ運動にボランティアとして参入していったが、メンバーになるという選択をした際に「(メンバーになれば)いつでもトイレ行きたいときにトイレ行きたいですって言える」「やっぱりスタッフはメンバーの介助をするのが仕事じゃないですか」[P Interview 2019.11.24]と介助の受けやすさを理由の一つとしてあげている。あわせて、ボランティアの立場だった時には頼みにくさが「心情的にはやっぱりあります」[P Interview 2019.11.24]と述べている。介助の頼みにくさの背後には、自分でできるべきだという健常者中心の社会規範があるだろう。だとすれば、介助の頼みにくさという経験は、そうした規範に準ずることができない立場に追いやられることであり、障害という差異の貶価の経験と捉えうる。

しかし、当時を振り返るPさんの語りは「養護学校以外の高校生とか、ボランティアの人とかが、たんぼぼの家があるからおいでよって言ってきて、面白そうやな、行こうと思って行った」[P Interview 2019.11.24]というものであり、養護学校の閉鎖性への違和感などが表明されているわけではない。また、たんぼぼ運動に参入していくにあたって、メンバーとなるまでは障害について「あんまり意識したこともなかったし、言われたこともなかった」[P Interview 2019.11.24]とも述べている。よって、契機Aと捉えうる事象は生起していたが、これらを通じて、たんぼぼ運動への関わりにおいて障害という差異をことさらに意識するようになったというわけではないようだ。

このような状況に変化が生じるのは、就職活動を通じてである。Pさんは、一般企業や行政で働くことも検討していたが、職場で介助者をつけることができないという障壁に直面し、その後「じゃあどうするかって言った時に、言い方悪いんですけど、たんぼぼが受け皿に」[P

Interview 2019.11.24] なったと振り返っている。「受け皿」の語には、そのはずではなかったのだがという物事の展開への不本意さが表れている。つまり、それまでPさんにとってたんぼぼ運動への関わりは高校生活や大学生生活の傍にあるものであったが、障害をめぐる就職差別という契機Aが生じたことで、予定外にたんぼぼ運動への関わりを増すことになったという認識が窺える。こう考えると、たんぼぼ運動に関わることに於いて、障害という差異が事情やいきさつとしての位置を持つようになり、Pさんがその後障害という差異をより焦点化する形で運動に関わっていく基盤が準備されたといえる。この時点では、積極的に「障害者」として関わっているというほどではないが、障害という差異がそれ以前より意識されていると考えてよいだろう。

5-2 契機B：運動への関わりにおける障害の積極的な意味づけの可能性

その後、Pさんはメンバーとなる選択をするが、その際には前述の介助の受けやすさのみならず、「たんぼぼのことを考える上で、メンバーの立場になるってというのがやっぱり大事なことやなって思っ。障害持っていない人がじゃあメンバーになれるかっていったらなれないじゃないですか。」[P Interview 2019.11.24] と、障害の経験があるからこそその自らの視点が、たんぼぼ運動にとって有意味であることを理由として挙げている。こうして、障害という差異に積極的な意味を付与する理路を見出したことは契機Bと捉えることができ、これ以降Pさんは「障害者」として物事を見たり、考えたりすることを大切にするようになる。つまり、たんぼぼ運動での活動において障害アイデンティティを表出するようになる。

たとえば、Pさんはメンバーになって分かったこととして、「子どもが声を出すより、お母さんたちが声を出すから、親目線。親目線でいって、良いところも悪いところもあるけど、親目線やったなあというのはあって。」[P Interview 2019.11.24] と、親目線の強さを指摘している。また、そうした親目線の強さが表れていた事柄として、「お母さんたちがやっぱり活動してきてはったから、ここで暮らすのが当然、だからコットンを作るんやって言っはったし。」[P Interview 2019.11.24] と、コットンハウスの建設を挙げている。会報においてコットンハウスは、親元から離れることを重視した「ケア付きの集合住宅」（1995年度「年次レポート」3-4項）と期待されており、集まって暮らすことが前提になっている。しかしPさんは、皆でそこに暮らし続けるのではなく、あくまでも地域での個別の生活に向かうことが重要だと考えていた。親目線の強さの指摘は、なぜもっとメンバーの声を聞かないのかとメンバーの立場から感じていたということであり、障害アイデンティティを以てたんぼぼ運動に関わっていたと考えられる。

また、エイブル・アート・ムーブメントの活動を通して契機Bが生起している。Pさんは、メンバーとしてはインペアメントに由来する表現の力強さを体験し、その後、スタッフとしては、この活動が障害への偏見の解除に有効であることを学芸員との協働などから経験していた。これらの契機Bを経て、障害という差異の意味や位置はどのように変化しただろうか。これを考えるにあたって、次のやりとりが参考になる。

Pさん：全く障害者と関係ないところで仕事をされている人が、いきなり私とかと一

緒に仕事をするっていう。……だんだん一緒にしていくうちに、すごいなんていうか、理解とか我慢っていうのが見えてきたりとか、障害者アートをすごいなあという見方ができて。なんか上から目線の言い方やけど、わかってきてくれはったりとか。

筆者：何が何でも全部素晴らしいんじゃないかと、これがこうだから面白いみたいな、見方というか。

Pさん：そう、すごいそう、なんていうかね、長いことたんぼぼとの関わりとか、ずっとたんぼぼにいて、たんぼぼっこ。たんぼぼっこやと思ってるんですよ。

筆者：ご自身を？ たんぼぼそだち？

Pさん：そうそう。そういうのがあるから、今のCILでも活動できるし、ここで、地域の中で暮らせるなあと思って。

[P Interview 2019.11.24]

上述の契機Bを境に、たんぼぼ運動において、Pさんがより障害という差異に根ざして思考したり活動したりするようになったかどうかについて、インタビューからは浮かび上がってこないため、考察するには限界がある。ただ、上述の引用に見られる、エイブル・アートの取り組みを含めたたんぼぼ運動での経験が、現在のCILでの活動や地域での生活に繋がっているという語りから、契機Bがただ無為に過ぎていったのではなく、「たんぼぼの家」退職後のPさんの取り組みにまで影響を及ぼしていたとまでは考えてよいだろう。以上の契機Bにつづく障害の意味・位置の考察から、メンバーという立場の重要視という契機Bを経て親目線の強さに気づき、たんぼぼ運動の進められ方に異見を抱きながらも、エイブル・アートの取り組みといった別様の契機Bもまた生起しており、自身をたんぼぼっこと呼ぶように、たんぼぼ運動に自己を投企しているという、Pさんの運動への関わり方が浮かび上がってくる。

ここまで見てきたように、Pさんは常に「障害者」としてたんぼぼ運動に参加していたわけではない。そうではなく、障害を差異として意識することがない時期もあれば、やや意識するようになるということもあったり、積極的に障害アイデンティティに根ざして意見を持つということもあった。障害という差異は、ある／ないという二項対立で捉えられる本質的なものとして経験されるのではなく、むしろ都度立ち現れたり、濃淡を帯びるようなものであったといえる。

6 終わりに

6-1 障害の本質化の回避：たんぼぼ運動側の要因

障害という差異が本質化されない運動経験がいかなるものであったかを再構成することが本稿の目的であったが、それでは、そのような経験を可能としていた運動側の要因にはいかなるものがあるだろうか。本項ではこのことを考えたい。

Pさんは、CILで働いている現在も自身を「たんぼぼっこ」と呼び、たんぼぼ運動を自己の投企先としている。それは、現在のCILでの仕事にたんぼぼ運動を通じて学んだことが生きているという語り¹²であったり、たんぼぼ運動を参照しながら「青い芝の会」の運動を相

対化したり社会問題を論じたりする¹³様子において、調査者の目にも印象的であった。Pさんが思うたんぼぼ運動の良さとは、いろいろな人が当たり前前に共にいる景色があったことである。

小学校の時の地域の子どもが、たんぼぼで。毎日学校から帰ってきて、たんぼぼで遊んで。最初は小さいから遊ぶしかなくて、勝手に遊んで。大きくなってきたら、ある日車椅子を押してたり。もうちょっと大きくなったら、メンバーとご飯を一緒に食べてたり。そんなことがあったね。[...] 社会の中で、どんな障害の人もいて当たり前じゃないですか。障害のない人もいて当たり前だし、お年寄りの人もいて当たり前だし。そういうのがすっごいたんぼぼにはありましたね。

[P Interview 2019.11.24]

たんぼぼの良いところは、概ね、いろんな人が関わっているということ。生活のこともそうやし、芸術を広げていこうっていうこともそうやし..... そういう広がりがあるっていうのはやっぱりどこにもないことやと思う。

[P Interview 2019.11.24]

たんぼぼ運動のこうした側面は、養護学校の閉鎖的な空間で過ごしていたPさんがたんぼぼ運動を「面白そうやな」と感じたことに通じ、運動に「障害者」として参入するのではなく、あまり障害を意識することなく過ごせていた要因の一つと言える。

また、障害という差異の本質化がある程度回避された運動側の要因として、ボランティア、メンバー、スタッフといった複数のポジションが用意されており、しかもその間の移動が可能であったことが挙げられる。メンバーという立場は障害の有無と結び付けられているが、障害とされるならメンバーにしかなり得なかったわけではない。そのような事態は端的に差別的である。そうしたシステムや運動文化が見られなかったことで、障害という差異を常に必ず意識するわけではないあり方でたんぼぼ運動に関わり続けることが可能であった。

6-2 本稿の意義と限界

障害のある当人やその家族にとどまらない多様な人々が関わり合うことには、コンフリクトの契機もまた見出しうるだろう。しかし、多様な人々が共に活動していたこと自体が、Pさんがたんぼぼ運動の良さとする部分であり、かつ、様々な人が集うからこそ、障害のある人も、障害という差異に規定されないあり方に開かれうる。障害を本質化せずに様々な人が共に活動するために、どのような個人の運動経験がこれまでであったのか、そしてその背後にどのような運動組織のあり方や運動文化があったのかを問うことは有意味であり、この点において本稿は一定の貢献をしたといえるだろう。かつ、そのような運動経験を捉えるモデルを提案した点に本稿の理論的意義が認められる。

一方、障害の有無を問わない連帯を考えると、それでは障害をどのように捉えるのかという認識論的課題に十分に踏み込めていない点や、たんぼぼ運動においても障害／健常という区別が本質化されていたような側面もまたあるだろうことへの批判的検討を欠いている

点に本稿の限界があり、今後考察を深めていきたい。

注

- 1 本稿は、社会的に構築されるカテゴリーとして障害の語を用いている。一方、発話の不自由さといった心身機能に関わる要素を指す際にインペアメントの語を用いている。
- 2 もちろん、Shakespeare(1996)は障害の抑圧モデルを否定しているのではない。あくまで、異なりに照準する抑圧モデルを「障害者運動は包摂と統合を希求する一方で、異なることを称揚するものだ」(Shakespeare 1996: 107)と認めつつ、「社会モデルは社会構築主義的であるはずだが、抑圧モデルは本質主義に転じうる」「異なることに根ざして自己を同定したり称揚することにはリスクがある」(ibid:107)と注意喚起しているのである。なお、この引用では構築主義に對置されるものとして本質主義の語が用いられている。本稿もこれに準じ、「本質化」の語を事物の構築的側面を等閑に付し、文脈に関わらずに、事物がそれ自体としての実体を持って存在しているかのように捉えることを指して用いている。
- 3 補足として、AとBの対立に先立って、AとBとの区別が生じている必要があることから、区別を対立の萌芽と位置付けることができる。
- 4 例外として、伊藤綾香(2016)は、障害者と健常者が共同生活を営みながら「連帯」を目指した「わっばの会」という事例の研究をしている。そこでは、障害者と健常者が協働していく実践と理念の生成・展開を、健常者の立ち位置に注目しながら描いている。
- 5 仁平(2017)は教育社会学におけるアイデンティティ研究の展開について論じたものであり、引用箇所は、同分野において因果論や社会化論の枠組みでの考察が多いことを踏まえての指摘である。とはいえ、同様の指摘は他の連子符社会学にも適用できるだろう。
- 6 Wiewiorka(2001=2009)において「差異」「集合的差異」「アイデンティティ」「集合的アイデンティティ」の明示的な定義は見られないが、本稿はこれらの語を次のように理解して使い分けている。まず、差異は当該社会において有徴とされる属性のことであり、差異に対してアイデンティティは、差異の積極的な価値づけを含んだ語である。そして差異がアイデンティティとされるには文化的資源を要する。この認識の根拠として、例えば文化が「アイデンティティを再形成・再発見しうるような素材」であるという記載がある(ibid:144)。次に、「集合的」の形容は、差異／アイデンティティの経験がある人々に共通しており、彼らをまとめ上げる働きをしているときに付加されるだろう。従って、ある個人がその差異によってある集合に帰属を見出すとき、そこには集合的差異が成り立っており、かつその帰属により自身の差異についての積極的な価値づけを得ている＝アイデンティティとしているとき、集合的アイデンティティが生成されている。
- 7 Wiewiorkaは、歴史的厚みがあり原初的と感じられるような差異に根差す集合的アイデンティティの例として国家や民族を挙げている。一方で、原初的差異に欠けているが故に差異の創造を必要とする場合として、本文中で触れた移民二世の他に次のような例を挙げている。アメリカ大陸に強制的に連れて来られることで歴史や文化を剥奪される経緯があったアフリカン＝アメリカン、公的空間での自己表出が妨げられていた同性愛者などである。障害者についても後者のタイプの差異として分類されている。Wiewiorkaが提示した二つの条件とはこうした後者のタイプの集合的アイデンティティの生成についてである(ibid:154)。
- 8 「たんぼの家」は次の3つの対象を指すように用いられる。①1980年に建設された日中活動の場の呼称②①の運営にあたる財団法人の名称③今日に至るまでたんぼ運動が創設してきた、奈良たんぼの会、財団法人たんぼの家、社会福祉法人わたぼうしの家をふくむ複数組織をまとめて指すときの呼称。
- 9 Pさんは多くのメンバーと違い、当時は車椅子を用いず外出することもあったという。
- 10 2020年11月に審査前原稿をPさんへ送付し、特に第4章と第5章について適切な考察であるかを尋ねた。2020年1月に返答があり、これに応じた修正を施した。

- 11 Zola (1982:205-211) は、障害者同士での日常経験の共有しがたさや、障害を核として連帯することの困難さについて言及している。
- 12 相談支援の仕事について大切にしていることを語られる際、「やっぱり、いろんな立場に人間だったら、そのおんなじ立場の人のことをより深く理解できるっていうか。[...] いろんな立場に立つてことが大事なんやっていうことを、たんぼぼのメンバーになった時にわかったし。」 [P Interview 2019.11.24] と、述べられている。
- 13 「青い芝はね、すごい自分たちで主張していったのは、あれはあれで良い面があって。あれがなかったら、障害持ってる人たちが地域で暮らすことがなかった。もっと遅い時代にしかならへんかった。そう思うんですけど、たんぼぼにいて思ったのは、青い芝っていうのは障害を持ってる人のことしか言わなかったんですよ。..... せやけどたんぼぼはそうじゃなくて、障害持ってる人のことも分かって欲しいから、自分らの意見ばかり言うんじゃないで、いろんな人を巻き込みながら伝えていく、啓蒙っていうのをやって行ったじゃないですか。そこが違うところで、健常者っていても、見た目は健常者かも知れへんけど、なんていうか隠れた障害があったりとか、見えない障害があったりとかね。ちょうど間にいる人とか。どっちかなっていういろんな人がいる中で、はっきりと分かれるわけじゃないから。」「たんぼぼ的な考えが、世の中にあったら、すごいもういろんな人が自分の才能を生かしながら暮らせるんやろうなあっていうのはすごいありますね」 [P Interview 2019.11.24]。

文献

- Baines, Annmarie.D, 2012, “Positioning, Strategizing, and Charming: How Students with Autism Construct Identities in Relation to Disability,” *Disability & Society*, 27(4): 547-561.
- Calderón-Almendros, Igracio and Rafael Calderón-Almendros, 2016, “‘I Open the Coffin and Here I Am’: Disability as Oppression and Education as Liberation in the Construction of Personal Identity,” *Disability & Society*, 31(1): 100-115.
- Cunnah, Werdy, 2015, “Disabled students: Identity, Inclusion and Work-Based Placements,” *Disability & Society*, 30(2): 213-226.
- 鄭膜恵, 2006, 「言語化されずに身体化された記憶と、複合的アイデンティティ」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』勁草書房, pp.199-240.
- 平島朝子, 2019, 「1970年代における「たんぼぼ運動」の変容過程——「障害児の親」役割の位置に注目して」『年報社会学論集』32: 96-106.
- 堀智久, 2014, 『障害学のアイデンティティ—日本における障害者運動の歴史から』生活書院.
- 伊藤綾香, 2016, 「障害者運動における障害者と健常者の連帯的活動の展開:1970年代の「わっぼの会」の活動を事例に」『福祉社会学研究』13: 82-105.
- 倉本智明, 1999, 「異形のパラドックス——青い芝・ドッグレッグス・劇団態変」石川准・長瀬修編『障害学への招待』pp.219-255.
- 草柳千早, 2004, 『「曖昧な生きづらさ」と社会——クレーム申し立ての社会学』世界思想社.
- 宮島喬, 2016, 「「新しい社会運動」とポスト 68 年の社会学：ひとつの覚書」『社会志林』法政大学社会学部学会, 175-188.
- 仁平典宏, 2017, 「アイデンティティ概念の構築主義的転回とその外部——ジェンダー・エスニシティ・若者・起源」日本教育社会学会編, 本田由紀・中村高康責任編集『教育社会学のフロンティア 1——学問としての展開と課題』岩波書店, pp.211-234.

- 岡原正幸, 2012, 「制度としての愛情-脱家族とは」『生の技法 家と施設を出て暮らす障害者の社会学』生活書院, pp.119-157.
- Shakespeare, Thomas, 1996, *Disability, Identity and Difference, Exploring the Divide*, Colin Barnes and Geof Mercer eds., The Disability Press: 94-113.
- 立岩真也, 2012, 「はやく・ゆっくり——自立生活運動の生成と展開」『生の技法 家と施設を出て暮らす障害者の社会学』生活書院, 258-353.
- 浦野茂, 2013, 「発達障害者のアイデンティティ」『社会学評論』64(3): 492-509.
- Watson, Nicholas, 2002, "Well, I Know This is Going to Sound Very Strange to You, but I Don't See Myself as a Disabled Person: Identity and disability," *Disability & Society*, 17(5): 509-527.
- Wieviorka, Michel, 2001, *La Différence: Identité culturelles: Enjeux, Débats et Politique.*, Paris: Ballard. (宮島喬・森千香子訳, 2009, 『差異—アイデンティティと文化の政治学』法政大学出版局.)
- 山下幸子, 2008, 『「健常」であることを見つめる』生活書院.
- 横塚晃一, 2007, 『母よ! 殺すな』生活書院.
- 全国自立生活センター協議会, 「JIL が考える自立生活センターとは (会員要件)」全国自立生活センター協議 HP (2021年2月22日最終閲覧, <http://www.j-il.jp/aboutjil>)
- Zola, Irving, Kenneth, 1982, *Missing Pieces: A Chronicle of Living with a Disability.*, Philadelphia: Temple University Press.

(ひらしま あさこ (せき あさこ)、東京大学大学院教育学研究科博士課程/日本学術振興会特別研究員、clock11121@gmail.com)
(査読者 星加良司、三枝七都子)

Joining Disability Movement without Essentializing One's Disability:

Case Study on the Experience of Ms.P in the Tanpopo Movement

SEKI HIRASHIMA, Asako

This study explored the experience of a person with a disability (Ms.P), who has been involved with a disability movement called the Tanpopo Movement. The aim is to trace the process of how she did not recognize/came to recognize the disability/disability identity while joining the movement.

The essentialism of disability can lead to a dichotomy and division between the people with disability and those who are not regarded as such, as researchers have pointed out. This paper suggests how such a situation can be surmounted through an environment of the movement where various people are involved.